

# おわりに

## エイジフリー社会をめざして

- **65歳=高齢者 年齢で区切ることに意味があるのか**

最後に年齢について改めて考えてみたいと思います。

伝統的に人口学の分野で使われており一般的にも定着している年齢区分があります。14歳までを年少人口、15～64歳を生産年齢人口、そして65歳以上を老年人口と区分する方法です。しかし、現在の日本で15歳から働く人の割合は必ずしも多くはありませんし、65歳以上を高齢者とする根拠についてもその根拠は明確ではありません。



また、高齢化率が7%を超えた社会を「高齢化社会(aging-society)」、14%を超えた社会を「高齢社会(aged-society)」と呼んでいます。これなども、1956(昭和31)年の国連の報告書で、当時の欧米先進国の水準を基にしつつ、仮に、7%以上を「高齢化した(aged)」社会と呼んでいたことに由来するのではないかといわれているものの、必ずしも定かではありません。因みに1956年の日本の平均寿命は男女ともに65歳前後で、現在より15歳以上も短い時代でした。また総人口は約9千万人、65歳以上は5%で、500万人にも達していませんでした。

- **プロダクティブ・エイジング**

現在は高齢化率の上昇は、労働力率の減少や社会保障費の増大等と関係づけて語られることが多く、どうしてもネガティブなイメージで語られがちですが、世界に先駆けて健康長寿が達成されたこと自体は、素直に喜び誇りに思うべきことではないでしょうか。



100歳高齢者は現在4万人を超えています。彼らが生まれた頃の平均寿命は40歳代でした。もっともっと生きたいと願った人たちのためにも、誰もが長生きできるような時代になったことを皆が喜び、そして長くなったこの寿命を意義あるものとしていかなければなりません。



これからの高齢社会を魅力と活力あるものとし、長寿を真に価値あるものにするためには、年齢に関係なく多くの人々が自分の能力を活かして社会と関わり、その可能性を発揮できる社会の枠組み作りが求められます。そのような社会を作り上げるのは私たち一人一人の責任です。

まず高齢者に対する思い込みや偏見から自由になって、日本の高齢者の真の姿を理解し、その暮らしをほんとうに充実した豊かなものにするために、今何をすべきかを考えることから始めます。そして、それは明日の高齢者である私たちの豊かさの第一歩になるでしょう。

(以上)

## ■参考資料一覧

- 
- 1-1 UN, *World Population Prospects 2008*
  - 2 総務省統計局『人口推計』2009
  - 4 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来人口推計』2006
  - 5 国立社会保障・人口問題研究所『日本の都道府県別将来人口推計』2007
  
  - 2-1 内閣府『第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』2005
  - 2 厚生労働省『国民生活基礎調査』2009
  - 3 国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計』2008
  
  - 3-1 総務省統計局『住宅・土地統計調査』2008
  - 1 総務省統計局『人口推計』2008
  - 1 厚生労働省『社会福祉施設等調査報告』2007
  - 1 厚生労働省『介護サービス施設・事業所調査』2007
  - 1 厚生労働省『患者調査』2007
  - 2 総務省統計局『住宅・土地統計調査』2008
  - 2 内閣府『高齢者の生活と意識 第6回国際比較調査』2005
  
  - 4-1 内閣府『第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』2005
  - 2 OECD, *Health Data 2010*
  - 3 厚生労働省『医療給付実態調査』2008
  - 4 厚生労働省『人口動態統計』2009
  - 6 OECD, *Health Data 2010*
  
  - 5-1 厚生労働省『介護事業状況報告』2008
  - 1 厚生労働省『介護給付費実態調査』2010.8
  - 2 厚生労働省『国民生活基礎調査』2007
  - 3 厚生労働省『介護給付費実態調査』2010.8
  - 3 厚生労働省『国民生活基礎調査』2007
  
  - 6-1 厚生労働省『国民生活基礎調査』2009
  - 2 厚生労働省『国民生活基礎調査』2009
  - 2 総務省統計局『家計調査』2007
  - 2 内閣府『国民経済計算』2006
  - 2 厚生労働省『被保護者全国一斉調査』2008
  
  - おわりに 総務省統計局『国勢調査』
  - 厚生労働省『第4回生命表』
  - 厚生労働省『完全生命表』
  - 厚生労働省『人口動態統計』2009
-



---

## 山崎まつ

1905年(明治38年)生まれ  
豆屋の看板娘(東京都)

---

東京都大田区の花巻のザルを編む家に生まれ、23歳で豆や乾物、雑貨を扱う万屋に嫁ぐ。

毎月一日だけの休みを除き、朝7時～夜10時まで営業したが、当時は家もなく人通りもまばらで、売上は1日10～20円にしかならなかった。ガスも水道もなく、七輪で炭をおこしてご飯を炊く生活で苦労した。

義父から教え込まれたソロバンが得意で、簡単な釣り銭なら暗算ですませている。

「ボケ」だけはなりたくない、現在も看板娘として毎日店先に立っている。色々な人が声を掛けてくれて退屈しない。

---